The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人間学的小説理論としてのブランケンブルク『小説試論』
Author(s)	津田, 保夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72718
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人間学的小説理論としてのブランケンブルク『小説試論』

津 田 保 夫

１．はじめに ― 近代小説と人間学

1774 年はドイツ文学史においてきわめて重要な年である。とくに小説のジャンルにおいて、理論と実作の画期的な二点の著作がその年に刊行されている。実作の方はゲーテの書簡体小説『若きウェルテルの悩み』であり、理論の方はブランケンブルクの『小説試論』（Versuch über den Roman）である。これらはともに、ドイツにおける近代小説の理論と実作の代表的著作だということができるだろう。このうち、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』は大ベストセラーとなり、いわゆるウェルテル病を蔓延させるほどの影響力を持ち、[1] 今日でも多数の外国語に翻訳されて世界中で愛読されている。

それに対してブランケンブルクの『小説試論』の方は、少なくとも表面上はさほど注目されたというわけではなく、今日でも一部の研究者を除くとあまり読まれることもないようである。[2] しかしながら、それは当時のドイツにおいてはまだ軽視されていた長編小説（Roman）という文学ジャンルの最初の理論的試みであるというだけでなく、その後発展していく近代小説のいくつかの重要な特質を顕著に示している。そしてその特質は、人間学的とでもいうことのできるものである。

ここでいう「人間学」（Anthropologie）とは、『若きウェルテルの悩み』や『小説試論』の 2 年前の 1772 年に刊行されたエルンスト・プラトナーによる『医師と哲学者のための人間学』で用いられた用語であり、当時展開しつつあった人間に関する新しい学問の潮流を表している。17 世紀のデカルト的心身二元論では、人間は思惟実体としての精神と延長実体としての身体とに峻別され、前者は哲学や形而上学において、後者は医学や生理学において、それぞれ別々に扱われていたが、18 世紀半ば頃に起こった学問史上の人間学的転回によって、それまでの神学的あるいは形而上学的人間観は衰退し、人間は精神と身体の合一体として捉えられ、経験的事実において考察されるようになり、これが人間学と自らを称するようになったのである。[3]

---

[1] 『若きウェルテルの悩み』の当時の社会および後世への影響については、たとえば Kurt Rothmann: Erläuterungen und Dokumente, Johann Wolfgang von Goethe. Die Leiden des jungen Werther. Revidierte Ausgabe. Ditzingen: Reclam 2000. S.126ff. 参照。

[2] たとえば大久保健治は、「『小説試論』がほとんど注目されず, その著者ブランケンブルクが二世紀のあいだまったく無名でありつづけた」ことを指摘し、「アカデミックな文学史は彼の名をしるすことすら忌み嫌うかのようだった」と述べている。大久保健治「フリードリッヒ・フォン・ブランケンブルクの位置」（日本独文学会編『ドイツ文学 38 号』1967 年）S.1. なお、大久保はブランケンブルクの『小説試論』をルカーチの小説論との関連において詳論している。

[3] 学問史上の人間学的転回と人間学の成立過程については、拙稿「十八世紀ドイツの人間学的転回とハレ大学の学問状況」（『言語文化共同研究プロジェクト 2017 文化の解読（18）』大阪大学大学院言語文化研究科 2018 年、S.11-20）を参照されたい。

しかしそのような人間学的観察によって見えてきたのは、精神と身体の調和を喪失して分裂した病める人間の姿であった。そしてそれは熱狂やメランコリー、狂気や犯罪や自殺などといった形であらわれ、文学はこれを好んで題材やテーマとして扱うようになった。このようにして当時の文学は人間学と深く関連するようになり、こうした状況は「文学的人間学」（literarische Anthropologie）とも呼ばれる。[4] そして、この文学的人間学の特徴をもっとも明確に表している文学ジャンルが、長編小説なのである。[5]

18 世紀半ば頃に成立してきた新しい学問としての人間学は、それまでとは異なる新たな人間像を発見したが、それは近代的人間とでも呼ぶことのできるものであろう。また、同時代の文学はまさにそのような近代的人間の姿を描き出し、その様々な問題点をテーマとして扱うようになった。そこには明らかに、中世やバロック期の文学とは異なる近代文学のいくつかの大きな特質が表れている。

ブランケンブルクの『小説試論』は、そのような近代的人間を人間学的に描きだす近代文学のジャンルとしての長年小説の理論を展開しているのであり、その点において文学史的にも注目されるべき重要な著作なのである。

２．『小説試論』の成立背景と刊行の意図

ブランケンブルク（Christian Friedrich von Blanckenburg）はポンメルンの貴族の出で、1744 年 1 月 24 日に生まれた。『小説試論』刊行時は 30 歳でプロイセンの軍人であったが、そのかたわらで劇や詩の創作も行い、膨大な数の書籍を収集していた。[6] 『小説試論』の中でも古典から同時代に至るまで多数の文学作品を取り上げており、ディレッタントではあるけれども、かなりの文学的素養を身につけていたといえるだろう。

長編小説（Roman）は当時のドイツでは、とくにイギリスのリチャードソンの『パミラ』（1740）やクラリッサ（1748）などの影響を受けた書簡体小説が流行し、ゲラートの『スウェーデンの G 伯爵夫人の生涯』（1747-48）などが人気を得るようになっていた。ゲーテの『若きウェルテルの悩み』もそうした書簡体形式で書かれた小説である。また同じくイギリスのフィールディングの『トム・ジョウンズ』（1749）のような一人の人物の波乱に満ちた人生経路を描いた小説も多くの人々に読まれ、ヴィーラントによって『アガトンの物語』（1766－67）などが書かれるようになる。

---

[4] この時期の文学的人間学の概要について、筆者は科学研究費補助金成果報告書『１８世紀ドイツにおける文学的人間学の研究』（2006 年）で整理している。しかし、残念ながらこの名称は日本ではほとんど普及していないようである。ドイツでの近年の研究状況についてはとくに、Alexander Košenina: Literarische Anthropologie. Die Neuentdeckung des Menschen. 2. Auflage. Berlin / Boston: de Gruyter 2016 参照。

[5] 実際、文学的人間学の概念を提唱したプフォーテンハウアーの著書『文学的人間学』で扱われていたのは自伝的文学を中心とする長編小説のみであった。Vgl. Helmut Pfotenhauer: Literarische Anthropologie. Stuttgart: Metzler 1987.

[6] Vgl. Friedrich von Blanckenburg: Versuch über den Roman. Faksimiledruck der Originalausgabe von 1774. Mit einem Nachwort von Eberhard Lämmert. Stuttgart: Metzler 1965. S.584f. 以下、『小説試論』からの引用はこの版から行い、カッコ内にページ数を記す。

この『アガトンの物語』について、レッシングは『ハンブルク演劇論』の第 69 篇（1767 年 12 月 29 日）で、「思索する人のために書かれた、古典的趣味のある、最初にして唯一の長編小説」[7] として、「争う余地なく今世紀の最高傑作の一つ」[8] であると絶賛しながらも、「ドイツ人の読者にとっては書かれた時期が早すぎたように思われる」[9] と述べている。小説は演劇や叙情詩あるいは叙事詩といった伝統的な文学ジャンルと比べると、当時はまだ低く見られていた。そこでブランケンブルクはヴィーラントの『アガトンの物語』を一つの模範にとり、小説を従来の叙事詩に代わるような近代的な文学ジャンルとして、理論的に確立しようと試みたのである。しかしながら、ブランケンブルクの『小説試論』はあくまでも「試論」（Versuch）であって、完結した体系的な理論構築をなすものではなく、ゴットシェートらの詩学のように創作上の規範や規則を示そうとするものでもない。むしろ数多くの文学作品を具体例として取り上げて論じるという批評的スタイルを取りながら、小説にとって重要な要素について様々な観点から考察し、それよって新しい近代文学としての小説ジャンルに何らかの理論的な根拠を与えようとしたのであった。

『小説試論』の序文においてブランケンブルクは、それが一人のディレッタントによって書かれたものであり、小説の「完全な理論」を提供するつもりはなく、その能力もないと明言している（S. IV）。彼がそこで意図したのは、小説という文学ジャンルに関して「意見を述べること」（Bemerkungen）であり、それによって多くの人々を「楽しませること」（Unterhaltung）であり、また人々の「趣味」（Geschmack）を向上させ「習俗」（Sitten）を醇化することである（S. IVf.）。それは同時に彼が小説自体に対して求めているものでもあり、その点において彼の文学的価値観はホラティウス以来の「教え楽しませる」（delectare et prodesse）という古い伝統を引き継いでいる。しかし、古代人とは異なる時代を生きる近代人としての同時代の人々にとっては、古代の文学形式である叙事詩とは異なる新しい文学形式としての小説こそふさわしいものだと彼は考えていた。そしてそのような近代人に対して「楽しませる」という美的効果と趣味や習俗を改善するという教育的効果を十分に発揮するためには、近代文学としての小説はどのようなものでなければならないかという問題が、『小説試論』では論じられているのである。

『小説試論』の本論は、第 1 部「いくつかの対象の魅力について」と第 2 部「小説の部分と全体の配列と形成について」の二つの部から成り立っている。第 1 部では読者を惹きつける小説の要素が論じられているが、そこでとくに問題となっているのは、小説で描き出されたり読者に喚起されたりする様々な情念や美徳であり、小説だけでなくギリシア悲劇やシェイクスピアやレッシングなどの劇作品からも多数の例が引き合いに出されている。そして第 2 部では、それが読者に効果的に作用するための小説の構成について考察されている。そのことからもわかるように、ブランケンブルクの『小説試論』では読者への作用というアリストテレス的な作用美学的観点から小説のあり方が論じられている。

---

[7] Gotthold Ephraim Lessing: Werke. 4. Bd. Hrsg. von. H. G. Göpfert. München: Hanser 1973. S.555.
[8] Ebd. S.554.
[9] Ebd.

本稿ではその中でもとくに、近代小説の人間学的な特徴を示していると思われる点を中心に検討したいと思う。それは、小説の描写対象としての人間、内面史の概念、そして読者への教育的機能の三点である。

３．小説の描写対象としての人間 － 叙事詩との比較

ブランケンブルクは『小説試論』の序論の中で、長編小説が今日の時代の産物であることを指摘し、古代の叙事詩と対比させている。つまり、叙事詩は古代という時代を背景として生まれた文学ジャンルであり、その時代には人間は「公民」（Bürger）すなわち「ある国家の成員」（Glied eines gewissen Staates）であったのに対し、近代において人間は公民である前に何よりもまず「人間」（Mensch）であり、長編小説はまさにそのような時代の文学ジャンルなのである。そこで彼は次のように言う。「公民を必要としない地域と、公民がもはや存在しない時代が、古代人たちの英雄叙事詩の『イーリアス』や『オデュッセイア』を小説へと変えたのである。最初の小説作家は、もしまったく公民的な時代に生まれて教育されていたならば、小説を書く代わりに、きっと叙事詩を書いたことであろう。」（S. XIII） したがって近代という時代の文学としての小説は公民としての人間ではなく、人間としての人間を見せなければならないのであり、「ありのままの人間性」すなわち「習俗や身分や偶然が与えうるあらゆるものを剥ぎ取られた人間性」こそが小説の描き出すべき重要な要素となる（S. XV）。

彼は本論第１部第１章でまず小説のジャンルと本性について論じるのだが、そこでも小説と叙事詩との相違の問題を取り上げ、叙事詩の描く対象が「公的な行為や出来事、すなわち公民の行動」（öffentliche Thaten und Begebenheiten, das ist, Handlungen des Bürgers）であるのに対して、小説のそれは「人間の行動と感情」（Handlungen und Empfindungen des Menschen）であると述べている（S.17）。[10] ここでとくに注目すべきなのは、人間の感情が小説の対象とされている点であろう。行為や行動あるいは出来事は外的なものであるのに対して、感情は人間の内面的なものである。そこでブランケンブルクはさらに続けて、叙事詩においては「公民の行為」が問題となるのに対して、小説においては「人間の存在」（das Seyn des Menschen）すなわち「その内的状態」（sein innrer Zustand）が重要だと述べている（S.18）。

このような対象の区別の根拠として彼が挙げているのは、読者の関心の相違である。つまり彼は、古代の公民としての人間の関心を惹くのは公的な出来事や行動であるが、近代の人間を強く惹き付けるのはむしろ人間の内的な感情だと主張する。文学の目的はまさにそのような読者への作用という観点から規定されている。したがって、「人間の感情と行動が、小説の本来の内容である」（ebd.）と結論づけられるのである。ただし、小説が描写の対象とするのは人間の感情と行動、すなわち内面と外面の両方であって、いずれか一方の

---

[10] このような叙事詩と小説の対象の区別については、古典劇に対する市民悲劇の対象の区別と関連づけることもできるだろう。Vgl. Kurt Wölfel: Friedrich Blanckenburgs »Versuch über den Roman«. In: Reinhold Grimm (Hg.): Deutsche Romantheorien. Frankfurt a. M.: Athenäum 1968. S.35.

みではない。つまり小説は、人間の外的行動と内的感情の双方をその連関において捉えて描き出さなければならないのである。

続く第 2 章では、そのような「人間の感情と行動」を小説において効果的に描き出すにはどうすればよいかという問題が提起され、小説作家には「数多くの観察」（S.24）と「人間の自然本性の知識」（ebd.）が必要となり、「人間を研究する」（ebd.）ことが求められるのだと答えられる。ここにすでに、小説は一種の人間学であり、小説作家は人間学者でなければならないことが明白に表明されている。それというのも、「人間の内面と外面はきわめて密接に関連しているので、外面の現象と人間の表出全体を説明し理解しようとするならば、必ずその内面を知っていなければならない」（S.263）からである。

ブランケンブルクは小説における人間の感情と行動の描写を読者への作用という観点から論じるのだが、それが読者を惹き付けて読者にも同様の感情を呼び起こすためには、「情念の発生と進行と生成の全体」（das Entstehen, Fortgehn und ganze Werden der Leidenschaften）を描くことが必要だと述べている（S.30）。そしてこのような人間の内面的な情念の生成過程の描写という考えは、第 2 部で扱われる小説における「内面史」という概念へと発展していくことになる。

４．内面史の概念

『小説試論』第 1 部ではそのあと、小説で描き出されたり読者に引き起こされたりする様々な人間の感情が多数の文学作品を例証に挙げながら検討されていく。そこで扱われている感情は、崇高や賛嘆、憐憫や恐怖、憤怒や絶望などだが、これらの感情はアリストテレスの『詩学』以来、演劇が観客に呼び起こす感情として論じられてきたものであり、『小説試論』の中でも多くの劇作品からの事例が引き合いに出されている。[11] 小説においては人間の感情が描写されるだけではなく、読者にも同様の感情が引き起こされるとブランケンブルクは考えていた。しかし、小説が読者に対して効果的に作用するためには、人間の感情はたんに場面において直接的に描写されるだけではなく、先に述べたように、その「生成」（Werden）の過程全体が記述されなければならない。そのための小説の部分と全体の配列と構成の問題が『小説試論』第 2 部のテーマである。

その第 2 部第 1 章でブランケンブルクはまず、小説作家にとっては対象となる材料（Materialien）を見いだすことよりもむしろそれに正しい配列（Anordnung）と全体の形式（Gestalt）を与えることが重要だと論じている（S.247f.）。そして続く第 2 章では、小説作家が描き出すのは「現実の世界の可能な人間たち」（die möglichen Menschen der wirklichen Welt）であり、読者はその「存在」（Seyn）や「行動」（Handeln）を「真実にしたがって」（der Wahrheit nach）見ようとするのだと述べる（S.257）。そしてそのた

[11] 演劇が観客に呼び起こす感情をめぐる議論は、1753 年にアリストテレスの『詩学』のクルツィウスによるドイツ語訳が出版されてから、ドイツでも活発に行われるようになっていた。これについてはたとえば、Matthias Luserke: Die Bändigung der wilden Seele. Literatur und Leidenschaft in der Aufklärung. SAtuttgart / Weimar: Metzler 1995. S.55ff. を参照されたい。

めには、「起こった物事の表面や外観」（S.259）を語るのではなく、「どのようにしてそれが起こったのか」（S.260）という過程を描かなければならないと主張する。

彼はさらに、外的な出来事を生じさせたり進展させたりする媒体は人間の「心」（Herz）であり、「人間の精神と心情の状態の全体」であるとする（S.260）。つまり、人間の心は何らかの行動を引き起こす原因となるし、その結果として起こった出来事はまた人間の心の状態に対して影響を与えることになる（S.261）。このようにして人間の心情の状態と外的な行動や出来事とは相互に影響し合っている。したがって小説は「内的および外的な因果関係の結び付き」（Verbindung des Zusammenhangs innrer und äußrer Ursachen und Wirkungen）を「目に見えるように」（anschauend）描き出さなければならない（S.284）。そしてそのためにはまた「人物たちの内的および外的存在の結び付き」（Verbindung des innern und äußern Seyns der Personen）が示されなければならないのである（S.286）。

長編小説はこのようにして、人間の内面と外面との相互交渉による発展過程を描き出すのであり、ブランケンブルクはそこで「内面史」（innere Geschichte）[12] という概念を提示し、それを小説の本質的特徴だとする。「どんな人間でも自分の内面史をもっている」（S.388）が、「だれか一人の人間の内面を正しく取り扱い、原因と結果をつねに密接な関係において示すためには、この内面に跳ね返って影響を与えうるような、そしてつねに与えているような外的状況を、しっかりと考慮に入れなければならない」（ebd.）ので、小説において内面史は主人公の内面だけではなく、つねに外的な状況や出来事との関連において記述されなければならない。そして、演劇が「すでに出来上がった、形成された性格」（S.390）のみを提示するのに対して、小説はその内面史において「登場人物の内面的状態の変化」（S.391）という人格の発展あるいは成長の過程を示す点において異なっている。したがってこの「内面史」こそが「長編小説の本質的で固有なもの」（S.392）だと主張されるのである。

このような人間の内面性の重視は、古代の叙事詩や中世の騎士物語などとは異なる近代小説の大きな特徴の一つであるとも言えるだろう。ブランケンブルクも『小説試論』第８章で「内面」（das Innre）こそ「本来人間がそうであるところのもの」（was eigentlich Mensch ist）であり、そこからわれわれの「最終目的」（Endzweck）を形成しなければならないと述べている（S.355）。つまり小説作家は「人間の内面を解明し、人間に自分自身を知ることを教える」（S.356）[13] ということを行わねばならないのである。

小説が描き出す人間の内面史は、言い換えれば人間の「思考力や感受力の形成あるいはむしろその歴史」（S.395）でもあるのだが、ブランケンブルクは「登場人物をきわめて悲惨な感じ方や考え方へと導く」（S.399）ような小説作家を批判する。小説は読者を最終的

---

[12] ここでは「内面史」と訳しておくが、Geschichte にはもちろん「物語」の意味もあり、「内面の物語」という意味も含まれている。

[13] 自分自身を知るということは当時の人間学において重要な課題であった。たとえば K. Ph. モーリッツの『経験心理学雑誌』などは「汝自身を知れ」（Gnothi sauton）というデルフォイの神殿の銘文をそのタイトルに掲げている。

には満足させ安心させるべきだと彼は考える。そのためには小説作家は「一つの性格の完成（Vollendung eines Charakters）」（S.254）、すなわち一人の人間が完全性や調和へと達するまでの魂の成長過程としての「内面史」を描き出さなければならない。そしてそれは小説の教育的機能と関連している。

５．小説の教育的機能

『小説試論』において人間の内面史を描くことは小説の最も重要な課題であるが、それは最終目的ではない。ブランケンブルクによれば、「すべての詩人の普遍的な最終目的は、楽しませることによって教えることである」（S.249）。これは先にも述べたとおりホラティウス的な文学観を踏襲したものだが、小説の目的もそのような読者に対する美的および教育的な作用にあり、内面史の描写はそのための手段にすぎない。

ブランケンブルクは文芸の楽しみの根拠を完全性に求めている。つまり、「われわれの完全性への衝動を刺激するものはすべて、あらゆる運動で最も快適なものを、われわれの中に引き起こす」（S.30）。したがって、詩人は「人間の完全性とその使命を促進しうるような感情や表象を産み出す」（S.252）ことが必要だと説く。そしてそのような完全性との関連で最も快適な感情として「崇高」（das Erhabene）が挙げられ（S.30）、それは「純粋な美徳と大いなる知性」および「激しい情念」から生じると述べられている（S.37f.）。崇高の感情を引き起こす情念としては「賛嘆」や「憐憫」、「恐怖」や「驚愕」などがあり、『小説試論』の第１部では崇高の感情を中心に、完全性を促す情念を読者に引き起こすことが論じられている。[14] また第２部での小説の構成に関する議論も、同様に読者への効果的な作用という観点から行われている。

小説は美的作用だけでなく、読者を完全性へと促進する教育的作用も有している。そしてそれは読者の思考力（denkende Kraft）と感受能力（empfindungsvermögen）の二つの方向に向けられる（S.253）。読者の感受能力は完全性につながるような感情を引き起こすことによって促進され、思考力は「美徳や弱点を持った人間や、そこから生じうる、あるいは生じざるをえない出来事」（Ebd.）を示すことによって育成される。つまり、その出来事がなぜ、どのようにして生じたのかという因果関係を洞察することを小説において学ぶことで、思考力は鍛えられるのである（S.293）。しかしまた、思考力が内的に相互に根拠づけられた表象を求めようと活動することは完全性と結びつくものであり、快感をもたらすものだとも述べられている（S.289）。

ブランケンブルクはさらに、「読者に情念を引き起こして、彼らの感情を適正な規模において活動にふさわしい対象へと向けて訓練する機会を与えることが、詩人の仕事である」（S.424）とも言う。そして、様々な情念の中でも、人類愛や同情などの「社交的情念（gesellige Leidenschaften）」（S.425）こそ詩人が引き起こすべきものであるとする。そ

[14] ここで挙げられている情念はいずれも、アリストテレスの『詩学』において悲劇が観客に引き起こすとされている „eleos“ と „phobos“ の感情の解釈をめぐる当時のドイツでの議論で挙がっていたものであり、ブランケンブルクはそのような悲劇に関連する情念を小説のジャンルに取り入れたのである。

のようにして訓練された社交的情念は現実生活において「われわれの完全性と全体の利益のために」（S.426）適用されうるのであるが、人間の中では「利己的情念」（selbstische Leidenschaften）の方が「社交的情念」よりも強く、「非社交的情念」（ungesellige Leidenschaften）はさらに強いのだから、小説作家は「社交的情念」を読者に喚起するように努力すべきだと彼は主張する（S.430）。つまり、「賢明なる神の摂理が、われわれ自身やその全体の完成のためにそれらの情念を与えてくださったのであり、そしてその発展と育成のために創作のきっかけを与えてくださった」（S.432）のであるから、「小説作家は、自分が仕事とするジャンルによって、とくに手中にある手段によって、高次の最終目的を達成しなければならないのであり、彼は魅了的なやり方で人間を楽しませることによって、その完全性へと育成するのを助けることができる」（ebd.）のである。

このようにしてブランケンブルクは『小説試論』において、近代的文学ジャンルとしての小説に人間の発展成長過程をその内面と外面の関連において描き出すという人間学的規定を与え、さらに読者の人間性発展への寄与という教育的使命をも課した。これによって小説は、近代という新しい時代に生きる近代人のための近代文学としての理論的根拠を得たのである。

６．おわりに

ブランケンブルクの『小説試論』刊行から数ヶ月後の 1774 年 9 月に、ゲーテの書簡体小説『若きウェルテルの悩み』が出版された。これは瞬く間にベストセラーとなったが、翌 1995 年にブランケンブルクはその書評を発表した。その中で彼は、『ウェルテル』の作者が「どのようにして彼の性格の基盤から次第に彼の運命が展開し生じてきたか」という「一人の男の内面史」を与えようとし、「ウェルテルの思考や感受の仕方の全体が生じて展開していく様子をわれわれはいわば目の前に見た」ことによって、その試みは全体として成功していると述べている。[15] ゲーテの『ウェルテル』は、ブランケンブルクが『小説試論』でやや批判的に捉えたような、主人公が「悲惨な感じ方や考え方」へと進んで破滅に至る物語なのだが、内面史という点において一定の評価を与えているようである。

ブランケンブルクが『小説試論』で小説の模範としたのはヴィーラントの『アガトンの物語』であり、その冒頭には、「徳は何を、そして知恵は何をなしうるか、その有用な例を彼はわれわれに示してくれた」[16] というホラティウスの言葉がモットーとして掲げられている。これに関して作者は、1773 年の第２版から第１部の冒頭に加えられた「アガトンにおける歴史性について」という文章の中で、作品の意図を次のように述べている。「死すべき人間が自然の力によって知恵と徳の双方においてどこまで到達しうるか、また外的な状況が私たちの考え方やわれわれの善行あるいは過失に、われわれの知恵や愚かさにどれだけ関与しているか、またどうして、自然なやり方においては、経験や過失、われわれ自身

[15] Košenina (a.a.O.) S.71.
[16] Christoph Martin Wieland: Werke in zwölf Bänden. Bd. 3. Geschichte des Agathon. Hrsg. von Klaus Manger. Frankfurt a.M.: Deutscher Klassiker Verlag 1986. S.9

の絶えざる向上の努力、われわれの考え方の頻繁な変化、しかし主としてはよい模範や賢明で善良な人々との交わりによってのみ、自ら賢明で善良な人間になることが可能であるかを、示そうとしたのである。」[17]　つまりこの作品では、アガトンという一人の自然な本性を持った人間が現実の自然な世界において様々な経験を経て、知恵と徳に到達する現実の自然な過程が描かれている。このように主人公が人格の完成へと向けて成長していく物語こそ、ブランケンブルクが理想とした長編小説の内面史であったろう。[18]

ブランケンブルクの『小説試論』から 11 年後の 1785 年に第 1 部が刊行されたカール・フィリップ・モーリッツの自伝的小説『アントン・ライザー』は「心理学小説」（Ein psychologischer Roman）という副題が付けられているが、その冒頭でそれが「人間の内面史を描こうとする本」[19] であると明言されている。つまりここでは、「はじめは小さくて取るに足りないように思われたものが、人生の進行につれて非常に重要なものとなってくること」[20] が示され、個々の出来事が一つの全体へとまとめられて意味連関が付与されて、一人の個人の「内面史」が形成され、語られるのである。しかしそれはブランケンブルクが模範としたヴィーラントの『アガトンの物語』のような、人格が完全性へと向かって形成されていく物語ではない。

『アントン・ライザー』では、まず魂が病んでいってメランコリーに陥り、自殺未遂にまでに至る主人公アントンの幼少期の内面史が語られる。そして過酷な現実に対し、アントンは読書と空想の世界に避難場所を求めるようになり、俳優としての経歴を始めるべく、ヴァイマルに滞在中という有名なエックホーフ劇団を追いかけて旅に出るが、入団を拒絶されてしまう。やむなくエアフルトに戻った彼は、そこへやってきたシュパイヒ劇団と契約を結ぶことに成功する。しかし移動先のライプチヒで彼を待っていたのは、経済的に困窮した団長が劇団の衣装類を売り払い、その金を持って逃亡したという知らせだった。こうして彼の夢は無残にも打ち砕かれたのである。

ヴィーラントの『アガトンの物語』では徳と知恵の合一という人間性の完成へ向かう道程が示されたのに対して、モーリッツの『アントン・ライザー』では主人公の文学や演劇への熱狂は、非情な現実による救いのない幻滅で終わる。第 4 部の序文で語り手は、アントンの心の中で「真実と幻影が、夢と現実が戦って」いて、「内面と外面の矛盾がそれまでの彼の人生のすべてであった」[21] と述べているが、『アガトンの物語』の結末で示されたような両者の融和はアントン・ライザーには与えられず、完全に分裂したままである。

『アントン・ライザー』が目的としていたのは、ブランケンブルクが求めたような神の

---

[17] Ebd., S.574.

[18] ブランケンブルクの『小説試論』におけるヴィーラントの『アガトンの物語』の評価については、Nikolas Immer: Friedrich von Blanckenburg und der Roman der Spätaufklärung. In: Michael Hofmann (Hg.): Aufklärung. Epoche-Autoren-Werke. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2013. S.184ff. 参照。

[19] Karl Philipp Moritz: Werke. 3 Bde. Hrsg. von Horst Günther. Frankfurt a.M.: Insel 1981. Bd.1. S.36.

[20] Ebd.

[21] Ebd., S.312.

摂理による人間の完全性への道程を示すことではなく、主人公の病める魂の冷静な病歴分析とその因果関係を客観的に説明記述することであった。それは「心理学小説」という副題が示しているように、彼が構想した「経験心理学」（Erfahrungsseelenkunde）の一環をなすものだったのである。実際『アントン・ライザー』は、もともとはモーリッツ自身が編集発行人として 1783 年に創刊した『経験心理学雑誌』で研究事例として断片的に報告されていたものであった。その『経験心理学雑誌』には『アントン・ライザー』と同じような病的な、あるいは異常な心理状態の事例がほかにも数多く掲載されている。そしてその後の時代の小説、とくにロマン主義の小説では、むしろそのような病的で異常な人間の内面心理が好んで描かれるようになっていくのである。

（本研究は JSPS 科研費 JP16K02568 の助成を受けたものです。）